トッレ・ チヴィカ

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

Modena: Cattedrale, Torre Civica, Piazza Grande

ピラミッド型尖塔

八角形の最上部と高い尖塔 (2) は、エンリコ・ダ・カンピオーネの指揮の下、1319 年に完成し、30 メートルの高さの、単一の層を形成しています。構造は中世のレンガ造りで、その先端部は 1890 年から 1896 年の間に交換された石板で覆われ、上部の内壁に固定金具が配置されているのが見られます。鉛をかぶせてある、最先端の部分だけが、最も古い時代の石板を残しています。内部の空間は漆喰塗りで、2008 年から 2009 年にかけての修復時に、過去の建築を記念する石碑より上部に、1300 年代の物と見られるフレスコ画の一部と、突端に濃い灰色の痕跡が発見されました。往時はこの空間内部が全て、フレスコ画で覆われていたのでしょう。外部に設けられた 2 つのバルコニーへと続く、119 段の見事ならせん階段は、1609 年に完成したものです。壁の傾斜にそって上に伸び、28 メートルの高度差を登っています。階段の木材には、オーク、ポプラ、ヨーロッパトウヒが使用されています。この階段は細い鉄板で支えられていましたが、傷みが激しく、近年新たに 22 枚の鉄板を、元の古い構造を崩さず取り外しできるように組み合わせた、補修が行われました。外部の特徴的な 8 つの 2 連窓のうち、4 つはふさがれています。記録によれば、1501 年の地震で被った被害を補修するため、外部の石材全周に補強工事を行った後に、この階が完成したとされています。構造を補強しつつ、傾斜したファサードの沈下を防ぐために、1500 年代に金属の支線が放射状に加えられ、尖塔のピラミッド型部分と、アーチ形状始点の面には、古い鎖が配されています。どちらも完全な補修ではなく、このため 2010 年には、外部稜線に補強を 2 ヶ所加えています。

利用案内・ 情報

利用案内・ 情報 ギルランディーナ塔の開館時間：

4月1日から9月30日まで：火曜日から金曜日 9時30分から13時 / 15時から19時 土曜・ 日曜・ 祝日：9時30分から19時

10月1日から3月31日まで：火曜日から金曜日 9時30分から13時/14時30分から17時30分

土曜・ 日曜・ 祝日：9時30分から17時30分

休館日、復活祭、12月25日、1月1日。1月31日（市の守護聖人の祝日）は開館。

チケット販売所は、上記閉館時間の30分前に終了。入館料：

ギルランディーナ塔チケット： 一人3ユーロ

5歳以下の小児、障害者の方とその介護者、ガイド、通訳者、（学校の種別に関わらず）引率教師は無料です。

割引券 2ユーロ：6～26歳のお子様と学生、65歳以上の方、10人以上の団体が対象です。

共通チケット：

6ユーロの料金で、チケットに記載された時間内に、以下の各所に入場できます。

ギルランディーナ塔、市庁舎の歴史的広間、市立酢醸造館、ドゥオーモ博物館。

5歳以下の小児、障害者の方とその介護者、ガイド、通訳者、（学校の種別に関わらず）引率教師は無料です。

インフォメーション： *IAT ツーリスト・ インフォメーション - Piazza Grande, 14 - 41121 Modena*

Comune di Modena

モデナ市振興・観光サービス

2018年12月改定

AR/S Archeosistemi Soc. Coop. - www.archeosistemi.it

建築

モデナ市のシンボルであるギルランディーナ塔は、ドゥオーモ北側に隣接しています。その名は、尖塔先端を飾る大理石の欄干（伊語でギルランディーナ）が由来とされています (A)。建築初期については、当時の記録が不足しているため、どのように進展したのか確定されていません。2011 年に完了した、最新の修復時に塔の分析が行われ、大聖堂と同時期の建設であることが確認されました。塔の建設は 12 世紀初頭に開始し、1319 年に完成しています。

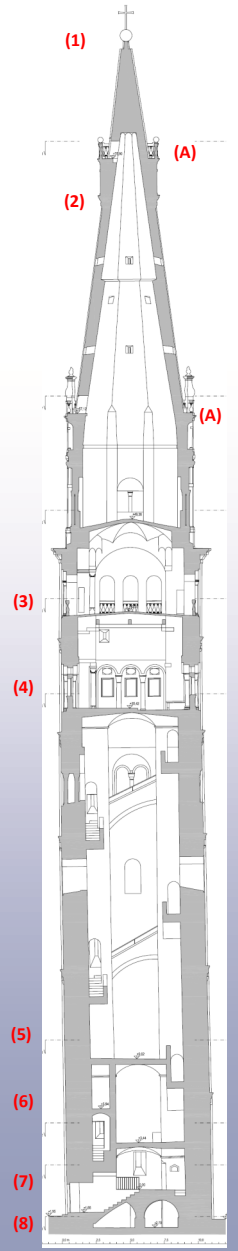
1500 年代には八角形の最上層の修復が、そして 1588 年には尖塔をやや高くする形の、修復が行われました。その後も数度にわたる改修が続きました。1609 年にはピラミッド型尖塔 (2) に木製階段が加えられ、1800 年代末期には、塔に密接していた建造物が取り除かれ、そして 1901 年には、現在のランフランコ通りに面した入り口に当たる、開口部が設けられました (8)。

塔とドゥオーモは、1300 年代のもので、1900 年代初頭に修復された、二つのアーチでつながれています。

この塔はもともと、ドゥオーモの鐘楼として建築され、市民生活に重要な役割を担ってきました。鐘の音は時を告げ、市壁の開門時刻を知らせ、緊急や危険を報じる役目を持っていました。「トッレサーニ」と呼ばれる階 (4) には、鐘守の住居がありました。また、その堅ろうな壁の内部にある、通称「聖具室」と呼ばれる間に、市の記録、(7) 聖遺物、ドゥオーモの芸術・ 宝物 (6) を収蔵していました。この塔は現在市の所有で、今でもドゥオーモのミサの時刻を知らせる、鐘 (3) が鳴り響いています。

高さ約 90 メートルのギルランディーナの塔は、1 辺が 11 メートルの正方形の基底から、50 メートルの塔が伸び、その上に八角形の多面体とピラミッド型の尖塔があり、尖塔の先端には黄金の球と十字架が飾られています (1)。鐘架層床面の高さ (3) までの建材は、ローマ時代の旧跡から資材を再利用しており、レンガ造りの壁表面を、旧イストリア地域やトルコなどの産地から運ばせた、実に 22 種もの異なる自然石で仕上げています。鐘を収めた階と尖塔には、再利用ではなく、特に運ばせた資材を用いています。ギルランディーナ塔は地震による地盤沈下のため、南西に傾いており、その傾斜度が階によって異なるのは、建築の過程でそのつど、垂直性を修正してきたためです。

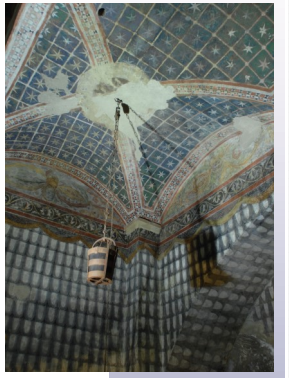
高さ89.32メートル



装飾物

塔は多数の装飾物で飾られ、細かいアーチを連ねたフレームと、コーベルテーブルが５層に横切っています (B)。このうち下から３層のフレーム角には、架空の生物 (C)、動物 (D)、人物 (E) の彫刻が見られます。
２層目の東面には、植物や動物をモチーフにしたローマ時代のパネルが３枚使われており (F)、また３層目の南面にはメドゥーサの頭像が飾られています。２連窓と第５層目の３連窓は、精巧な柱頭で飾られています (G)。19 基の柱頭が塔の外部に、８基はトッレサーニの間に使われています。柱頭の意匠やコーベルには、人や動物の頭像が多く見られ、これらと第３のフレーム角の物は、12- 13 世紀にさかのぼる、ドゥオーモのポルタ・レッジャや内陣仕切の支柱と、同種の意匠で彫刻されています。2011 年には、下から２番目の東面アーチフレーム (H) の下から、赤い装飾の痕跡が発見されました。1200 年代前半の物と思われる、ユリと花が連なるモチーフは、カンピオーネ派の職人の作品である可能性が高く、中世期にこの塔がどのように装飾されていたかを理解するのに、非常に重要な発見でした。

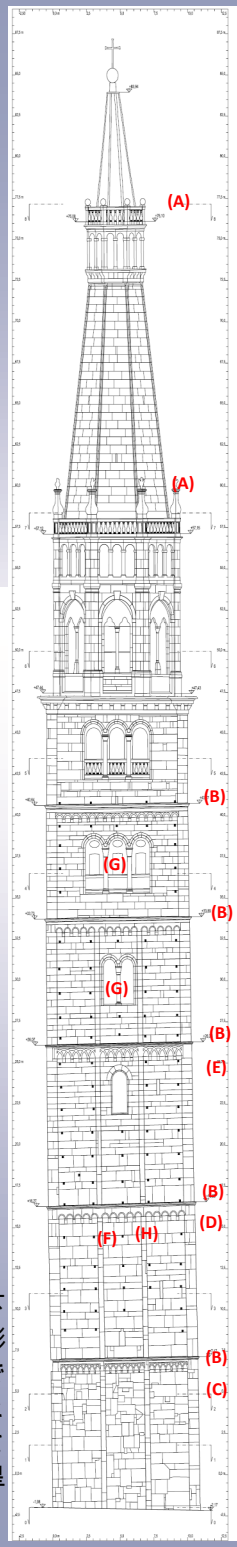
奪われた手桶の間



奪われた手桶の間(6)は、カルペスティーノの階と下から一番目のストリングコースの、ちょうど半分の高さに位置しています。これは、外部の階の仕切と塔内部床面の高さが、一致していないためです。14世紀初頭にはすでに、大聖堂の聖遺物や芸術品・宝物、市の記録書類が、この間の控室に保管されていました。
広間の名は、ボローニャのサン・フェリーチェ通りにあった公営井戸から、ザッポリーノの戦い（1325年）の最中に略奪してきたとされる、木と鉄の手桶に由来します。戦の卑劣な略奪品が、速やかに市のシンボルとして、宝の様にまつられるようになり、アレッサンドロ・タッソーニが1622年に書いた、同名詩によってその名が知れ渡りました。作品中に手桶の記述があります。

手桶はすぐに高い塔に収められ、太い鎖で石造りのアーチに吊り下げられ、
今に至るまで、あたかも栄冠の様に保存されているのだ。
（詩の一部訳）

現物は安全のため、市庁舎に保管されており、広間の中央には、複製の手桶が鎖で吊り下げられています。広間全体がフレスコ画で飾られ、星空や入り口の鉄門のモチーフを投影した、四角い網目のようなフレスコ画の効果もあって、全体が巨大な宝箱のような印象です。鉄門が網目状のモチーフになっているのは、手桶をはっきり見せるためではないかと考えられています。この広間の装飾は、ゴシック様式の特徴を見せ、1300年代のものとされています。この広間の重要性が装飾を通じて象徴的に分り、興味深いです。中世には皇帝のマントを意味した、ヴェアの毛皮文様が使用されているのが、その好例です。



科学研究機器の間

鐘を鳴らすロープが達しているこの階 (5) から、建築物の内部がうかがえます。高さ約 20 メートルに及ぶ垂直の空洞内には、壁に取り付けられた階段の踊り場が、四角で柱と交差し、時には大窓と重なることもあるのを、計算に入れずに設計したように見られます。1898 年には塔の傾斜を確かめるために、尖塔から２本の鉛直を、勾配差の両端にそれぞれ吊り下げて、計測が行われました。各階の床面には、計測水準点を示した、大理石の小片が今も残されています。2003 年から傾斜の自動計測システムが採用されました。内部空間の全長に、銅管が渡されているのが見えるはずです。銅管内には電動振り子がしこまれていて、これは、時間の経過につれ起きる、塔とドゥオーモの変位を測定する、総合的な計器の一部となっています。全てのセンサーが１台のコンピューターに接続し、専門技術者が解析できるように、計測値を記録し保存しています。レンガ造りがむき出しのままの内部の壁は、古代ローマのムティーナから奪った、古い建造物の資材を再利用したもので、洪水の痕跡が厚い層となって、しみついたままでした。

トッレサーニの間

５番目の階にあるトッレサーニの間 (4) は、1184 年中に完成し、「トッレサーニ」と呼ばれた市に仕える警護職の住居がありました。警護職の存在は、1306 年から 1800 年代半ばまで記録に残っています。警護職は、市の防衛のための見張り役であり、門の開閉を告げ、時を知らせるために鐘を鳴らし、また有事の警告としてや、公式な祭典のためにも鐘を鳴らしました。16 世紀末には、トッレサーニの間の一部に公爵の居城方向への開口部が設けられ、見晴らし台にも使われていました。優美な腰掛を二つ備え付け、エステ家の鷲が掲げるモデナの紋章と、公爵の冠を描いたフレスコ画で飾られました。冠は 1700 年代初頭に改めて描かれたものであろうとされています。北西の角にある柱には、鐘架層へと上るらせん階段が取り付けられています。この空間内部には円柱が８本そびえ、塔の第二次建設期（1180 年頃）のものと思われる、興味深い柱頭が飾られています。柱頭の２基は、精巧な彫刻が施されています。ダビデの柱頭（東の三連窓）には、音楽とダンスを題材にした彫刻が刻まれ、外壁第三ストリングコースの外角リリーフの数点に、同様の題材の彫刻が見られます。彫刻には、ひげを生やし冠をいただいた男性が一人、ハープを爪弾いており、中世には芸術の教祖とあがめられていた、ダビデ王とされています。裁判の柱頭（南の三連窓）には、良き裁判官と悪しき裁判官の題材が彫られ、裁判官が判決を言い渡すメメント（ラテン語で思い出せの意）、つまり警告の場面を表現していると思われます。これは、不公平でお金で判決を変える裁判官は、自分の判断とは異なる判決を下すだろうという意味の言葉が、刻まれていることから分ります。彫刻で飾られた柱頭が、もともとこの塔の装飾用であったのかは、確かではありませんが、一方が宗教的で、もう一方が民主的な、現代にも通じる題材は、この塔の、大聖堂の鐘楼であると同時に、市民の塔である二重の役割を、体現するかのようです。